

# 1996 Anniversary 30th Acoustic Guitars by Ovation

# Collectors' Edition

限定200本

OVATION'S 30TH ANNIVERSARY SERIES

Suggested Retail Price 1996-TBP Stereo ¥280,000 (with Case)



HexFX®

Stereo Acoustic/Electric Guitar Preamp



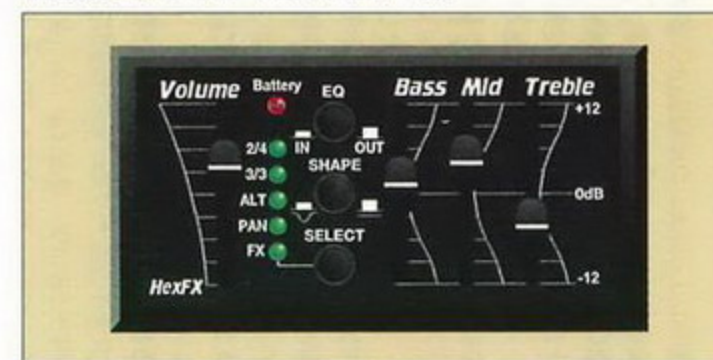
## オベーション誕生30周年記念モデル ザ・1996・オベーション・コレクターズ・エディション [1996 Collectors' Edition の主な特徴]

- ニューカラーのトランスペラント・バーガンディ (TPB) は、このギターのために特に開発されたもの。フィンガーボードとヘッドストックに使用されるエボニーとのコンビネーションが、エレガントで美しい外観を創り出している。
- 「真珠婚式」に代表されるように、30周年を祝う伝統の宝石と言えば「真珠」。この伝統を受け継いで、1996-TPBには真珠層の象眼模様がふんだんに使用されている。200片以上の真珠層をフィンガーボードとボディ・バインディングに丹念に手で埋め込み、さらに、12フレット目にも「30周年」を記念する真珠層の象眼模様を施している。
- ロゼットも特別仕様である。OVATIONの伝統的デザインである「オーク・リーフ (オークの葉)」は従来モデルと同様ながら、素材はプラスチックではなく、硬質のエボニーに真珠層の「オーク・リーフ」の象眼模様をあしらっている。
- 1996-TPBには、新開発の非常にユニークなプリアンプ・システムが付属する。その名は、「HexFX」。この HexFX は、未だかつてギターでは実現されたことのない、独特の機能を持つステレオ・プリアンプである。

### [HexFXの主な機能]

- モノ・モードでも、ステレオ・モードでも作動可能な2つの出力ジャック。モノ・モードでは、両方のジャックがアクティブとなる。ステレオ・モードでは、2本のケーブルか、1ジャック式のシングル・ステレオ・ケーブルの使用となる。
- 3種類の切り替え式ステレオ出力を標準装備。  
2/4 : チャンネル1にE6、A5、チャンネル2にD4、G3、B2、E1を出力。  
3/3 : チャンネル1にE6、A5、D4、チャンネル2にG3、B2、E1を出力。  
Alternate : チャンネル1にE6、D4、B2、チャンネル2にA5、G3、E1を出力。
- 3種類の新開発ステレオ効果機能。  
Pan : チャンネル1にE6を、チャンネル2にE1を出力。その他は自動的に互いに「パン」される。  
FX1 : 弦を2つのグループ (E6/D4/B2、A5/G3/E1) に分け、ステレオ・ミックスによって2つのグループを左から右へ、右から左へと自動的に移動させることによって、自然な「ステレオ・コーラス」効果を生み出す。  
FX2 : 機能の内容はFX1と同様で、移動の速度が速くなる。

### ★HexFXのコントロールとインジケータ。



#### Volume

プリアンプの出力レベルを設定するための、スライド式コントロール。つまみを上にスライドさせると、出力レベルが上昇する。HexFXの信号出力能力は非常に強力なので、ご使用のアンプやミキサーを「オーバーライド」しないようにご注意ください。不要な信号カラレーションに気づいた場合は、このコントロールでギターの出カレベルを下げてほしい。

#### Battery Low

このインジケータには、2つのバッテリー・チェック機能がある。ひとつの機能は、ケーブルを出力ジャックに差し込むと短時間点滅し、電池が入っていることを知らせること。点滅が確認できない場合は、電池が切れているか、入っていないかのどちらかである。もうひとつの機能は、ギターに入れた電池が約7ボルトより低下すると連続的に点灯すること。この状態になったら、できるだけ早く電池を交換することをお勧めする。平均的な使用状況では、電池1個につき100時間の演奏が可能。

#### EQコントロール

ギターのオーディオ・スペクトルに含まれる特定の音域を強めたり、弱めたりするときは、このEQ部のコントロールを操作する。すべてのコントロールが中央にあるとき、信号はEQ回路を通過する。EQノブを中央より上に上げると、その音域が強くなる。同様に、EQノブを中央より下に下げると、その音域が弱くなる。HexFXプリアンプでは、ギターのオーディオ・スペクトルに含まれる3つの音域を、±12 dBの範囲で同時に調整することができる。

[Low] EQコントロール: ベース域の音勢を上昇または低下させる。このコントロールを中央より上に上げると、サウンドの重厚感が増す。この音域の音勢を下げると、重苦しさをなく、軽快な音質となる。

[High] EQコントロール: 高音域 (トレブル) に反映される点を除いては、[Low]





EQコントロールと同じ。このコントロールを上げると、明るくて透明感のあるサウンドになり、下げると、落ち着いた丸みのある音質となる。

[Mid-band] コントロール：中音域のハーモニックスの加減に有効。

### EQ In/Out

この押しボタンは、EQ部のON/OFFを行う。このスイッチが押されているとき、EQがアクティブとなり、スイッチを元に戻すと、EQ回路がバイパスされる。スタジオ環境によって、外部EQを使用した方が望ましい場合には、EQ回路のバイパスをご使用願いたい。また、このON/OFFスイッチは、オリジナル・サウンドがEQ調整によってどのように変化しているかを素早くチェックできるほか、別個の第2EQ「チャンネル」にも即座にアクセスできる。

### Shape

このコントロールをON（スイッチが押された状態）にすると、ピックアップのサウンドに固定のEQ曲線を追加できる。技術的には、プリシェイプ回路が作動することで、ベースとトレブルの音域が強化され、中音域のレスポンスが低下した状態になると言える。このプリエンファシスは単独で使用することも、3EQコントロールで調整した設定と併用することもできる。

### ステレオ設定

[Shape] 押しボタンの真下にある [Select] スイッチは、各種の弦割り当てを行ったり、HexFXの真骨頂といえるステレオ・イメージングを実行するためのスイッチ。図1～5に各種ステレオ・モードをイラストで示したので、参照していただきたい。

プリアンプがONのとき（ギターのケーブル・プラグがジャックA<Gold>に差し込まれた状態）、割り当て回路の論理が既定のモノ・モードに戻る。このモードでは、すべての弦がジャックA<Gold>（そしてジャックB<Black>）に均等に割り当てられる。

- [Select] と表示されたスイッチを軽く押すと、6種類のステレオ・モードのうち最初のモードがONになり、[2/4] ラベルの隣にあるLEDが点灯する。このモードでは、E6とA5の弦が一方のステレオ出力に割り当てられ、残りの弦はもう一方のステレオ出力に割り当てられる。マルチチャンネルのミキサーまたはアンプに接続した場合、各出力に全く異なる調音または効果を選択することが可能になる。（図1）

- [Select] 押しボタンをもう一度押すと、次の弦割り当てモードがアクティブになり、[3/3] ラベルの隣にあるLEDが点灯する。このモードでは、低音の3弦（E6、A5、D4）と高音の3弦（E1、B2、G3）が異なる出力に割り当てられる。（図2）

- [Select] スイッチをさらに押すと、[Alt] のLEDが点灯する。このモードでは、弦が交互に各出力に割り当てられる（E1、G3、A5が一方のチャンネル、B2、D4、E6はもう一方のチャンネル）。このモードでは、ステレオP.A.システムか2つの独立したアンプに接続した場合に、幅広いステレオ・イメージを生み出す。（図3）

- [Select] スイッチをさらに押すと、次のモードがONになり、[Pan] LEDが点灯する。[Pan] モードでは、個々の弦のサウンドが、ギター上の相互の距離間隔に比例して2つの出力に割り当てられる。例えば、ステレオP.A.に接続している場合、低音のE弦は一方の端まで、そして高音のE弦は他方の端までいっぱいパンされ、中間の弦は、左から右の順に位置関係を反映して割り当てられる。（図4）

- 最後は、[FX] のラベルが付いたLED。[Select] スイッチをもう一度押すと、このLEDが点滅し、「特殊効果」の自動パンニング機能がONになる。ひとつおきの弦が1グループにまとめられ、一方のチャンネルから他方のチャンネルにゆくりとパンして、微妙なスウィープ動作を生み出す。これは、ステレオ・イメージングを高め、延ばした音の音勢を高める効果がある。[Select] スイッチをもう一度押すとLEDの点滅が速くなり、自動パンニングのスウィープ速度が上がって、さらにダイナミックな迫力が生まれる。（図5）

- もう一度 [Select] スイッチを押すと、プリアンプがモノ・モードに戻り、すべてのLEDが消灯する。

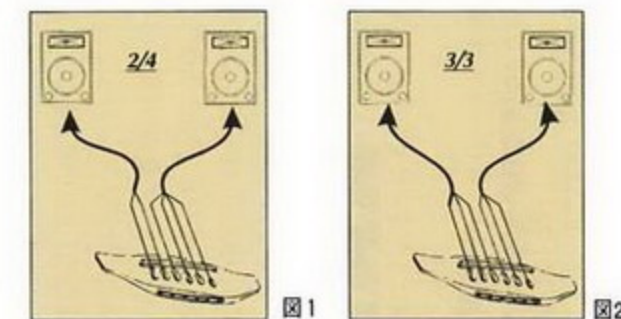


図1

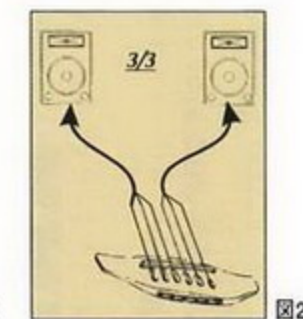


図2

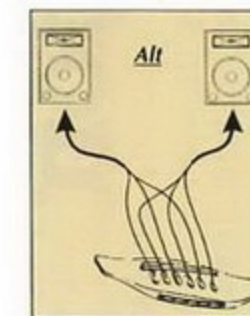


図3

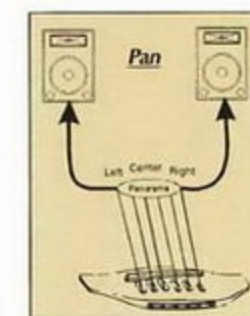


図4

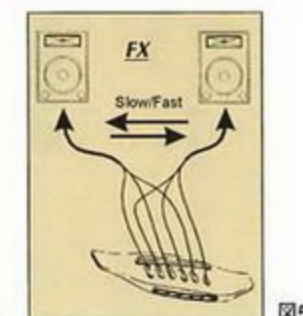


図5



## It was Thirty Years Ago

(それは30年前のことだった)

航空学のパイオニア、Charlie Kaman が画期的なことをやってのけた。アコースティック・ギターに革命をもたらしたのだ。1966年、新しいアイデアの詰まった、ラウンド・バックの Ovation ギターが登場した。その出現に、プロのミュージシャンらはエールを送ったが、頭の固い人達には受け入れられなかった。

60年代のはじめ、Kaman は、自身の航空機会社の多角化をはかり、航空宇宙テクノロジーのノウハウの生かせる他の市場へ進出することにした。長年のギター愛好家として、彼はプレーヤーの求めるものを熟知していたし、また、ヘリコプターのブレードを扱ってきた経験から、どのギター製造者よりも振動に対する理解は深かった。

本人曰く：「ヘリコプターをつくる場合は、エンジニアはいかに振動をなくすかを研究するんだ。ギターをつくるには、どうやって振動を起こすかを考えなければならない。でも、振動は振動に変わらないんだ」

彼はさらに、こうつけ加えた：「単にギターの製造に参入しようとしたわけではないんだ。我々の航空宇宙テクノロジーの知識を駆使すれば、より良い製品が作り出せると確信していた」。そこで1964年、Charlie は航空宇宙エンジニアと専門家を数人集め（そのうち何人かは木工を趣味にしていた）、プロジェクトを組んだ。

皆、Kaman のやり方には慣れていた—まず、問題を突き詰め；可能な解決方法を全て探り出し；一番有効な方法を見極めたらあとは突っ走るのだ。彼らは、アコースティック・ギターの平らなバックが、実は音のバランスと増幅を妨げるということを発見した。そこで、ギター造りの鉄則を、まずひとつ打ち破り、ラウンド・バックをつくったのだ。このデザインで増幅の問題は改良され、ベースからトレブルにわたるバランスもよくなり、非常に力強く頑丈な楽器が仕上がった。

2年後、何世代かの試作品を経た後、Ovation ギターの第一号が製品化された。Balladeer モデルである。ラウンド・バックも今でこそ知られるようになったが、当初、Ovation は業界では奇妙な存在と見られたのだった。

## Acoustic Becomes Electric

(アコースティックからエレクトリックへ)

Ovation ギターに最初に注目したのは、ステージで大音響の出せるアコースティック・ギターを求めていたプロのミュージシャンたちだった。そんなギタリストの代表選手が、60年代後期に活躍した Glen Campbell 氏 だ。毎週、Glen 氏はテレビの"The Glen Campbell Goodtime Hour" で、何百万ものアメリカの家庭に向けて、Ovation ギターを演奏した。

Ovation ギターを愛用しているうちに、Glen 氏 はある注文を出した。マイクから離れて演奏できるように、ピックアップを内蔵したギターをつくってほしいというのだ。

アコースティック・ギターのためのピックアップを製造する試みは、それまでも何度かなされていたが、どれも欠点があった。Glen 氏の友人で、ギター・プレーヤーでもある Jerry Reed 氏はクラシック・ギターにアンダー・サドル・ピックアップをつけていて、なかなかいい音色を出していた。

ブリッジ・サドルの下にピエゾ・クリスタルを置くという、このピックアップの発想自体には問題はなかった。しかし、これはナイロン弦のギターのために考案されたもので、音質と弦の不均衡という問題があり、スチール弦ではそれが強調されてしまった。

Ovation のエンジニアたちは、このギターの仕組みを研究し、独自のピックアップの製作に取りかかった。それまでは、アコースティック・ギターをステージで演奏するためには、マイクの前に立って演奏するか、サウンドホールにマグネティック・ピックアップを装着するか、サウンドボードに張り付け型のピックアップ "bug" を使用するしか選択肢はなかった。これらはあまり効果はなく、特にバンドにドラムや電子楽器があると、なおさらだった。

## Striking the Balance

(バランスを求めて)

エンジニアたちは研究の結果、よいピックアップとなるためには、トップの振動と弦の振動とを感じるとるバランスが大切だと分かった。ちょうどよいバランスがとれた時、最高のアコースティックらしい音質と豊かな音量が得られるのだ。

彼らが考案したピックアップ搭載により、世界で初めて、プロに認められたアコースティック・エレクトリック・ギターが誕生した。現在でも同じピックアップが、Ovation のアコースティック・エレクトリック・ギターに搭載されている。音のバランスがよく、アウトプットも高く、サドルの形が工夫されていて正確なイントネーションが可能だ。

ピエゾ・ピックアップはインピーダンスが高い。これは、長いケーブルを経由するに連れて、音質が変化しやすいということである。これを防ぐために、Ovation では“緩衝器つき” プリアンプを開発してインピーダンスを下げることで、音質を保ち、アウトプットをコントロールした。

これがアコースティック・エレクトリック・ギターの幕開けとなったのだ。Bill Kaman はこう振り返る：「我々が初めてつくったプリアンプは、とてもすっきりしたデザインだった。音調フィルターがふたつあって、“アコースティックっぽい”音が強調された。それに加えて、インピーダンスを適切な範囲に収めることによって、非常に豊かで深い響きを奏でるギターに仕上がった。初期のプリアンプはボリュームを調整するだけのものだったんだ。後になって、回路にトーン・コントロールを加えて、さらにステレオ・プリアンプも用意した」

「はじめのころは、我々の製造するギターのうち、ピックアップを搭載したものは15%程度にすぎなかった。それが10年後、我が社のギターの90%がアコースティック・エレクトリック・ギターとなったんだ。驚くべきことは、

ライバル社がアコースティック・エレクトリック・ギターをスタンダード・モデルとして発売するまでに、10年もかかったということだ」

Ovation のピックアップは、今日まで変わらずに来たが、電気系はプレーヤーの要求や音響の補助技術の進展にともなって進化してきた。25年間以上もの間、Ovation は世界を代表するアコースティック・エレクトリック・ギターとして、そのリーダー的地位を保ってきた。

## OP's and FET's

(OP と FET)

1985年に、OP-24 と FET-3 のふたつのプリアンプ & EQ システムが発売された。両方ともに、3バンドのアクティブ・イコライゼーションで、各バンドで24dBの調整が可能であった。高周波帯と低周波帯は、ハイとローのパス・フィルターでコントロールされた。“シェルビング型”イコライザーと呼ばれるもので、トレブル・コントロールは減衰点以上の周波数を変化させる。同じように、ベース・コントロールは減衰点以下の周波数を変化させる。

ミッド・コントロールはふつう、“peak-and-dip”型イコライザーと呼ばれるように、特定の周波数でブーストおよびカットする際に、近接した周波数が傾斜して平らにつながる。

これらの新しいシステムによって、ミキシング・コンソール・タイプのコントロールを、ギタリストが手にすることができた。部屋の状態、曲目、聴き手に合わせて、かなりの精度でサウンドを修正することが可能になったのである。

## Optima...a New Benchmark

(Optima...新たな基準の誕生)

OP-24 と FET-3 のシステムは、1994年のコレクターズ・エディションが発売されるまで、Ovation のアコースティック・エレクトリック・ギターに搭載されていた。アコースティック・ギターはますますロック・バンドの中心的な存在になり、ステージ演奏の大音量に対応するには、より高性能なフィードバック・コントロールと低ノイズ化が必要になった。そして、Optima が開発された。

Optima のEQは正確な4つのバンド（それぞれ80Hz、600Hz、6.6KHz、10KHz）から構成されており、音調を緻密に調整できるよう、さらに非常に急勾配の(30dB/octave)ノッチ・フィルターをつけることで、できるだけ透明感が得られるよう設計された。微調整が可能で、1音ごとにフィードバックを排除できる。これはつまり、音の特徴を変えずに、フィードバックの問題をクリアできるということである。

プロのスタジオ・ミュージシャンやツアー・ミュージシャンのために開発された Optima は、最新のアナログ・エレクトロニクスを導入し、レコーディング・スタジオのコンソール並みのノイズ対策仕様(-104.3dB)を誇る。さらにプロ仕様として、標準の Hi-Z アウトプットに加えて、Lo-Z バランスのアウトプットもある。これで、ピックアップまたはレコーディング・コンソールに接続する direct box が必要なくなる。XLR アウトプットはまた、ミキサーまたはコンソールからファントム電源を供給することも可能だ。

Optima はもう一点で、Ovation のリーダーシップを証明した。オンボード・クロマティック・チューナーである。この非常に精密なデジタル・チューナーは、瞬時に準備でき、オープンヤノン・スタンダードのチューニングにも使用できる。また、このチューナーは、A440以外のチューニングで、ピアノやその他の楽器に対応させることもできる。

Optima は現在、Adamas, Adamas II, LongNeck, Custom Legend の各アコースティック・エレクトリック・モデルに搭載されている。

Optima のバリエーションである OP-X プリアンプは、Optima と同じ低ノイズ回路、4バンドEQ、そしてノッチ・フィルターを含むが、チューナーと Lo-Z アウトプットは装備していない。OP-X は Elite, Elite Bass, Legend, Folklore, Country Artist, そしてナイロン弦の Balladeer の各モデルに搭載されている。

## OP-24Plus...Low Noise Flexibility

(OP-24 プラス……低ノイズ順応性)

何年もの間、Ovation の OP-24 がアコースティック・エレクトリック・ギターにおける業界の標準仕様であった。この由緒ある OP-24 が、最新の低ノイズ・アナログ回路と、“スリー&ハーフ”バンド・イコライザーを得てアップデートされた。

前身モデル同様、OP-24 プラスはギターの全体的なレベルと音調のバランスを調整する。3つのEQバンドがあり、ミッド・バンドの center frequency を400Hzまたは1KHzにシフトすることができる。ロー・バンドとハイ・バンドは シェルビング・イコライザーで、それぞれ roll-off point が80Hzと10KHzである。OP-24 プラスにはさらにPre-Shape 回路があり、ベースとトレブルを持ち上げることで40Hz以下の“ゴロゴロ”する周波数を削減する。

イコライザー部は、スイッチの切り替えにより、完全に信号回路から外することも可能である。

OP-24 プラスは、Elite Standard, Mandolin, Standard Balladeer, Ultra Deluxe, Celebrity Deluxe, そして Celebrity の各アコースティック・エレクトリック・モデルに搭載されている。

## OptiMax...The Stage and Studio Ultimate

(OptiMax...ステージとスタジオにおける究極のシステム)

アコースティック・ギターの音量を増幅させる最も古い方法として、マイクがある。現在でも、スタジオではマイクが使われることが多い。独特の持ち味で高音域が“かすれた”感じになり、オン・ボード・ピックアップのサウンドに“磨き”をかけるのだ。ライブの場合の問題点は、マイクでは音量

を上げ切る前にフィードバックを起こしてしまうということだ。アコースティック・エレクトリック・システムの中には、ギターのボディ内に小さなマイクをつけるものもあるが、これは“かぶさった”ような、こもった音になってしまう。

Ovation では、マイク以外の可能性を吟味し、Telex 社のエンジニアたちと共同して、OptiMax システムを開発した。Ovation のアンダー・サドル・ピックアップに加えて、OptiMax では超小型マイクを、ブリッジの前、サウンドボードと弦の間に穴あきの囲いを設けマウントした。この位置だと、弦からはオーバー・トーンを、そしてトップからは倍音の振動を拾うことができる。ギター内部のサウンドの“発生源”から離れているため、オープンで“生っぽい”響きになる。

OptiMax は単にマイクを付属しただけではない。ステージ、またはスタジオで、究極のアコースティック・サウンドを演出することの出来る完璧なエレクトロニクス・システムなのである。マイクとピックアップが、クロスオーバーと“高性能”なレベル調整機能をもった特別な回路によって一体となり調和している。

基本的には、こういう仕組みだ：“ブレンド”コントロールがアンダー・サドル・ピックアップからの高周波を減衰させ、マイクからの高周波に置き換える。コントロールを増進することによって、ブリッジ・ピックアップからの音はよりいっそうマイクからの音に置き換えられ、1対1の割合にまで到達する。よって、どんな場合でも、マイク音の占める理想的な割合が正確に設定できるのだ。

クロスオーバーを切り替えると、ピックアップとマイク間の減衰点が600Hz または1.2KHz に設定される。高いクロスオーバーはフィードバックを抑える働きをし、低いクロスオーバーでは、全体のサウンドの中でマイク音の占める割合を高くでき、特にレコーディング向きである。

大音量のライブの場合、OptiMax では独自のアウトプット方法により、モニターにはブリッジ・ピックアップの信号だけを送り、会場にはフルレンジの信号を届けるということができる。そしてファントム電源に対応した Lo-Z バランス・ライン・アウトプットもある。

OptiMax は、Legend モデル1機種と、Classic モデル1機種に搭載されている。

## Hex/FX...Beyond Stereo

(Hex/FX...ステレオを越えて)

最近では、ナイトクラブでの演奏程度のレベルでも、PAシステムはステレオのものが増えている。アコースティック・ギターの演奏にインパクトを与えるには、ステレオにするのがいい。1996年モデルのために、Ovation ではピックアップと最新のエレクトロニクスのシステムを開発し、今までアコースティック・エレクトリック・ギターでは実現できなかったステレオの世界を生み出した。

Ovation は常に、コレクターズ・シリーズを通して新しい、高度なアイデアを紹介してきた。1996年のコレクターズ・エディションでは、ギターの世界で初めての HexFX という新しいシステムを発表する。スタジオ用のノイズの少ないプリアンプとイコライザーの機能を併せ持つ HexFX は、各弦のアウトプットを個別に拾い、ステレオ空間をつくり上げるのだ。

それは、Ovation ピックアップの6分化（各弦ごとに6つの個別のアウトプット）と6つの個別のプリアンプから成る。CMOSスイッチング・システムがそれぞれのアウトプットの割り当てをコントロールして、ステレオ空間に各弦を配置する。

ボタンひとつで左右の音の配置を調整することができるうえ、自動的に移動させる機能まであって、ステレオ空間で弦を交互に動かすことによって、自然なコーラス音を創り出すことができる。

## ...and Beyond

(...そして未来へ)

毎年のコレクターズ・シリーズは、Ovation のデザイナー及びエンジニアたちにとって、新しい挑戦の場となっている。そして毎年、新しい独創的なギターを生み出してきた。コレクターズ・シリーズを通して、アコースティック・ギターの新境地を開拓することは、今や Ovation の伝統であり、1997年モデルも、すでに製作に取りかかっている。アコースティック・エレクトリック・ギターの未来を見つめるには、Ovation のコレクターズ・シリーズに注目すべきである。

## For the first few years

(最初の数年について)

コレクターズ・シリーズを始めて数年は、Bill Kaman が雑誌広告に登場して新製品の宣伝に当たった。当時、Bill は Ovation のテクノロジー担当副社長で、新しいギターの開発と、新しい発想の育成に意欲的に取り組んだ。彼は現在、Kaman Music の社長であるが、毎年のコレクターズ・エディションをはじめ、Ovation 社の研究開発事業にも深く関わり続けている。

## Certificate of Authenticity

(保証書)

1996年コレクターズ・エディションの本ギターは、シリーズ15代目であり、1996年モデルとして製造された1,280本のうちの一本である。本ギターの機能とカラーの組み合わせは、このエディション以外で再現されることはないことを、ここに保証する。



## Ovation コレクターズ・シリーズの歴史

ギターのアイデアを考え出してくれるのは、いつもプレーヤーである。社員プレーヤーであったり、Ovation ギターの愛用者たちから寄せられることもある。

Ovation のコレクターズ・シリーズを正しくとらえるには、1976年までその歴史をさかのぼる必要がある。それは、我が社の創立10周年と、祖国アメリカの建国200周年が重なった年である。このふたつの出来事を記念して、“Patriot”モデルを特別にデザインし、1,776本を世に送り出した。

1980年ごろ、Patriot モデルのギターが、ギター・コレクターの間で人気を集めていた。ギターを収集することは、それまでにも行われていたことだが、本格的にはこのころ、その風習がギター・プレーヤーの間で広く浸透しはじめたのである。

同じころ、Ovation ギターを愛用する人気カントリー歌手の Earl Thomas Conway氏 に、我が社は一本のギターの製作を依頼された。Custom Legend モデルを Blue Sunburst で仕上げ、Adamas モデルのステレオ・エレクトロニクスを搭載するというものであった。演奏の度に、Conway 氏のそのギターは、サウンドとルックスのよさで評判になった。

1982年には、このギターのモデルを限定製作することになった。前作の限定モデルがコレクターの間で人気が出たため、新作は「コレクターズ・シリーズ」と名づけることにした。いつも新しいものを追求めるコレクターの心を満足させるために、我々はコレクターズ・シリーズを今までにないほど面白く、個性的なものに仕上げようと、努力を重ねた。

新しいギターは評判よく、我が社の目指した路線は正しかったということがわかった。'82年4月（予約注文の受付を打ち切った年月）までに、1,908本を販売し、次のモデルの開発へと受け継がれていった。

1983年には、新しいボディの厚みを決定し、初めて超薄型のスーパー・シャロー・ボディのアコースティック・エレクトリック・ギターが完成した。Heart の Nancy Wilson は、かねてから低音のハウリングを抑え、ダイナミックなロックンロール演奏に適した楽器を探していた。この新しいモデルこそがその要求にこたえるものであり、彼女には、印刷媒体の宣伝広告に登場してもらった。

デザインはというと Legend モデルで、我が社独自のアクティブ・プリアンプ、Kaman Barネックを装備し、独特の Barnboard 仕上げであった。これは、すぐに評判になり、'83年の生産期間中、2,754本が製造された。

2年間で5,000本近いギターを製造販売できたことで、コレクターズ・シリーズはさらに続けられることになった。'84年には、大好評だったスーパー・シャロー・ボディに、マルチ・サウンドホールの Elite モデルのデザインを組み合わせるものをつくることになった。この新しいサウンド・ホールの縁飾り"epaulets"には、メイプル、ウォールナット、チーク、パドークといった外国産の木材を用いた、新しいデザインが取り入れられ（このデザインは今日まで受け継がれている）、電気系には Ovation 製のピックアップとボリューム・トーン・プリアンプを装備していた。

黒を基調としたデザインで、ソリッド・スプルース・トップに独自のエボニー仕上げを施し、フィンガーボード、マシーン・ヘッド・ボタンもエボニー仕上げである。この1984年のコレクターズ・シリーズもまた、大成功を収め、1月から4月までの期間で、世界中で2,637本が販売された。

コレクターズ・シリーズの12弦モデルをつくってほしいという問い合わせも、いくつかあった。そのため、1985年のコレクターズ・シリーズは、6弦モデルと12弦モデルのペアで発表した。前年と同じく、スーパー・シャローの Elite モデルだが、この年は新たな Autumnburst という塗装を施した。こうしてペアで売り出したペア・モデルの片方が、最初の12弦スーパー・シャロー・モデルとなった。

両モデルとも大変評判がよかったが（合計で2,913本製造という新記録）、アリーナ・ステージで演奏することの多いミュージシャンの間では、12弦モデルがとくに人気が高かった。このモデルでは、12弦ギターの豊かな音質と共に、ホッケー・リンクで演奏出来るほどの音の鮮明さと豊かな音量レベルを実現できたからである。1985年にツアー活動で人気絶頂だったグループ、REO Speedwagon の Kevin Cronin 氏は、このモデルをペアで購入し、'85年のコレクターズ・シリーズの印刷媒体広告に、Bill Kaman と一緒に登場してもらった。

これらのギターが大規模な会場で通用した一因としては、新しく開発された OP-24 の、3バンド・プリアンプ&イコライザー・システムがあげられる。それまでアコースティック・エレクトリック・ギターのプレーヤーは、着脱式の“バグ”と呼ばれるものや、マグネティック・サウンドホール・ピックアップを、ラッカー杯のイコライザーに接続してなんとか演奏していたのである。ところが、OP-24 の出現で、“プラグ・アンド・プレイ”が可能になったのだ。プレーヤーは、24デシベルの音調整で、指先ひとつによる低・中・高周波の調整ができるようになったのである。

1986年には、Ovation の創立20周年とコレクターズ・シリーズ発売5周年が重なった。コレクターズ・シリーズでは、ラウンド・サウンドホールとマルチ・サウンドホールの Elite モデル、それから Elite 系の6弦と12弦のペアを発表してきた。シリーズをバランスよく締めくくるため、こんどはラウンド・サウンドホールをペアを出すことに決定した。

当時のグラフィック・アートの傾向として、黒、白、赤を構成色とした、“クリーンな”色調に人気が集まっていた。そんな流行を取り入れて、'86年のコレクターズ・シリーズは、白黒の真珠光沢仕上げの、6弦ギターと12弦のギターのペアに決まった。この年は、Bill と Mark O'Connor 氏のふたりで、印刷媒体広告に登場した。

スーパー・シャロー・ボディに、カットウェイ、そして大好評の OP-24 エレクトロニクスを搭載して、'86年のモデルはステージ用ギターとしてデザインされた。真珠光沢の白いトップは、ステージライトを浴びて見事に活気づき、機能面からも、ステージでこそ本領発揮できるモデルとなった。

生産は2,250本に減少した。そう少ない数ではないが、前年の生産数を600本以上も下回った。

1987年には、コレクターズ・シリーズはさらに高級志向に転じ、さらに少ない1,000本以下の限定生産に決まった。このモデルのデザイン・コンセプトは、アコースティック・サウンドと自然素材ということであった。1987年のコレクターズ・シリーズのパンフレットでは、次のように述べている：“機能面での実用性だけでなく、サウンド面とビジュアル面の美しさの、理想的な融合を追求したモデル。”

最高級のギタートップ・セットを数多く集めた中から、スタイルはディーブ・ボディの Elite モデルが選ばれた。トップは全て手作業で仕上げられ、独自の Nutmeg 塗装でぼかした色合いは、ビンテージな雰囲気を醸し出した。

トップ縁取りは、アワビの貝殻を手作業で象眼し、ケースをあけたときのインパクトは凄かった。エボニーのフィンガーボードもアワビで縁取られ、22個の特製の洋銀のフレットが付いていた。

このギターをつくるには、大変な時間を要した。特に、入念に象眼する工程が一番時間がかかった。製造期間が終了した時点で、928本しかできていなかった。これは今でも Ovation のコレクターズ・モデルの中で、最も限定されたモデルである。

1988年モデルは、“エレキ・プレーヤーのためのアコースティック”としてデザインされた。マルチ・サウンドホールの、スーパー・シャロー・ボディであったが、斬新な改良点がひとつあった。ネックがボディと交わる部分を、通常の14フレットの位置ではなく、16フレット目にしたのだ。これはエレキ・プレーヤーにとっては、注目すべき変更点であった。肩に掛けたとき、ネックが、エレキと同じように違和感なく、プレーヤーの手に馴染むのだ。他のアコースティック・ギターよりも、上部のフレットが非常に居やすいのである。スーパー・シャロー・カットウェイ・ボディでは、24のフレットの全てに手が届くのである。

こうして、エレキ・ギターと同じ感覚で演奏できるアコースティック・ギターが誕生したのである。見た目も、エレキと大差ない。ソリッド・スプルース・トップは独自の ピューター仕上げで、サウンド・ホールは光沢のある白と黒の縁飾りのエボレットである。光沢のあるクロムのマシン・ヘッドと本体はエレキ的なルックスを見せていた。

新しいブリッジ・ポジションに対応し、またプラグ・インされることのほうが多いという予想のもとに、トップは強化された。Ovation のピックアップ・システムと、OP-24 アクティブ・イコライザーを搭載した、アコースティック・エレクトリック・ギターである。'88モデルの製造総数は、1,177本にのぼった。

1989年には、“エレキ・プレーヤーのためのアコースティック”というコンセプトが、さらにもう一歩進められた。ボディに邪魔されずに16フレットまで手が届くネック、派手な装飾、そしてもちろん OP-24 の電気系も、エレキ・プレーヤーに大好評であった。

'89年のコレクターズ・エディションでは、'88年モデルと同じように、スーパー・シャロー・カットウェイ・ボディと16フレットのネックで構成したが、ラウンド・サウンドホールにして、6つのペグを一列に並べた新しいペグヘッドを取り入れた。さらにエレキらしさを出すために、人目を引く珍しい Blue Pearl 塗装とした。

'89年モデルでは新しいブリッジの形がデザインされ、プラグ・インされたときのサウンドにパンチが加わった。国内外で合計981本が製造された。'89年コレクターズ・エディションの印刷媒体広告では、Ovation の全社員が、創業150年になるコネチカットの工場の正面に集合して登場した。

1990年コレクターズ・エディションでは、さらに特殊化に拍車がかかった。ギターのトップに木目の出たウッドを用いる研究開発を進めた結果、手応えを得ることができた。我々はすばらしい新素材バースアイ・メイプルを十分に確保し、試作品を何本か製作した。皆一様に好評だったので、16フレット・モデルを2機種—スーパー・シャロー・ボディとディーブ・カットウェイ・ボディを製作することになった。

画期的なこのコレクターズ・モデルは、最終的には1,400本が世に送り出されたのである。

1991年、Ovation の創立25周年を記念して、コレクターズ・シリーズでは Ovation の原点である Balladeerモデルに再び目を向けた。その結果、'91年モデルは、当初の Custom Balladeer の特別バージョンとなった。特別な改良点としては、まず、1966年ももとの Balladeerモデルのパターンを調整したプレーシング・パターンがあげられる。

それから、一番変わっていたのは、ヘッドストックとフィンガーボードの洋銀のインレイと、銀のバラの花飾りといえよう。'91年モデルもまた、定番の OP-24 プリアンプとイコライザー・システムを搭載。総数1,756本が製造された。

1992年には、“変わったトップ・ウッド”のコンセプトに戻ってみた。多くのプレーヤー、とくに大きな聴衆を抱えるエレキ・プレーヤーの間では、サウンドとビジュアルの両面から、バースアイメイプル材のコレクターズ・モデルが支持されていた。

木目の強いウッドを大量に入手することができ、試行錯誤の末、Tamo Ash がルックス面でもサウンド面でも、素材として最適だと判断した。最終テストの際、木目の強いキルテッド・アッシュは明るいHoneyburstに磨き上げることで見事な輝きを発した。

アッシュのトップを引き立てるため、フィンガーボードには、Adamas ギターと同じウォールナットが選ばれた。このフィンガーボードは水に強くするためにポリマー加工がされている。ヘッドストックも、Honey仕上げのアッシュ張りにした。

Guitar World magazine は、'92年版コレクターズ・モデルを評する際に、“エレキ・プレーヤーにとって、最適のアコースティック・ギター”と表現し、演奏の快適性と他に類を見ないプラグ・イン・サウンドのよさを絶賛した。アッシュの在庫が切れるまでに、1,995本が製造された。

1992年の一年間、Bill Kaman はかなりの時間を割いて、ナッシュビルでギター・プレーヤーの友人と過ごした。彼らは録音に適したアコースティック・ギターのサウンドについて語り合った。より透明で、鋭い、“アコースティックらしさ”にあふれたサウンドについてである。そして、1993年のコレクターズ・エディションをどのようなものにするかの詳細は、Frankfurt Music Show で Bill Kaman と、Adrian Legg氏、Steve Sutton氏 が話し合った結果固まり、外見的なディテールはその後にデザイン・チームによって決定された。

より透明で鋭いトーンは、Ovation の FET-3 プリアンプに新しいピックアップを組み合わせるにより生まれた。この圧力に敏感なピックアップは、thinline saddle をナットから15度離して傾けてある。このため、ブリッジへの圧力は増し、鋭く、透明な音を出せるようになったのだ。

“アコースティックらしさ”は、厳選されたソリッド・スプルース・トップに、非常に薄いサテン・フィニッシュを加え、新しくミッド・ディプス・ボディにすることによって実現した。このギターこそ、ナッシュビルのクルーが求めていた、透明で、オープンで、鋭いトーンであった。製造期間中、1,537本が造られた。

1994年コレクターズ・エディションで初めて、Optima のプリアンプが導入された。今回はナッシュビルではなく、シアトルとロスでのクルーのインスピレーションに基づくものであった。このアン・プラグしたサウンドはロックンロールの現場に衝撃を与えた。コンサート・サウンド補強技術が高度に進化したこととともない、アコースティック・エレクトリック・ギターもまた、進歩しなければならなかったのである。

Optima のプリアンプこそが、その進歩の体現である。Optima には4バンドの洗練されたイコライザーがあり、さらに狭い周波数帯をもつ -30dB notch filter がフィードバックを抑える。標準的な1/4"出力と、ミキシング・コンソールへ直結するためにデザインされた balanced XLR 出力がある。そしてさらに、本体内蔵タイプでは試みられたことのない、chromatic tuner を搭載している。

'94年モデルの、ビジュアル面で最も特徴的な要素は、木目入りのアッシュ、メイプル、エボニー、そしてブラック・パールからなる円状のインレイである。ソリッド・スプルース・トップの薄い Nutmeg 塗装のぼかした色合いは、その現代的な機能とは裏腹の、クラシックな趣きを醸し出した。1,763本が製造された。

アコースティック・エレクトリック・ギターを発明したのは、Ovation であり、Ovation はこの分野における主な技術革新の先頭に立ってきた。そして1995年のコレクターズ・エディションでまた、新たな基準を打ち立てることに成功した。Telex の技術者と共に2年もの間研究開発に取り組み、OptiMax システムがついに誕生したのだ。

OptiMax システムは、弦の下でブリッジにマウントした超小型マイクと、Ovation ピックアップとを、全く新しい電気系統で統合したものだ。マイクとピックアップの間のバランスとクロスオーバーを調整する custom blend control の付いた、この'95年モデルは、生演奏でも録音でも、他のどのアコースティック・エレクトリック・ギターよりも“アコースティックらしい”サウンドを可能にした。製造目標は1,500本に設定されていたが、最終的には1,502本が製造された。

コレクターズ・シリーズは、“新しい発想のものをつくらう”という Ovation の伝統の中から生まれている。そして今では、21世紀へ向けてアコースティック・エレクトリック・ギターを進展させる、新たなアイデアやコンセプトの実験台となっている。

Ovation コレクターズ・エディションのギターを所有するということは、ギターの発展の歴史の一部を手にする、ということなのだ。あなたにもぜひ、堪能していただきたい。

※本文章は、1996コレクターズ・エディション英語版カタログ「Thirty Years of Innovation」を和訳したものです。英語版カタログと合わせて、ぜひ、お読みください。



オペレーション総輸入元  
中尾貿易株式会社

〒103東京都中央区日本橋久松町12-8(和孝第14ビル)  
TEL (03) 3851-2331 <代>